

2024年5月の地震活動の評価（案）

1. 主な地震活動

目立った活動はなかった。

2. 各領域別の地震活動

(1) 北海道地方

目立った活動はなかった。

(2) 東北地方

目立った活動はなかった。

(3) 関東・中部地方

- 1月1日に石川県能登地方で発生したM7.6の地震の震源域では、地震活動が低下してきていたものの、6月3日にはM6.0の地震（最大震度5強）が発生するなど、2020年12月から活発になった地震活動は依然として継続している。5月1日から5月31日までに震度1以上を観測した地震は28回（震度4：0回、震度3：2回）発生している。5月中の最大規模の地震は、10日18時50分及び19時40分に発生したM3.8の地震（18時50分の地震は最大震度3、19時40分の地震は最大震度1）である。なお、4月中に震度1以上を観測した地震は45回であった。

陸のプレート内で発生した大地震の事例では、平成16年（2004年）新潟県中越地震（M6.8）、平成28年（2016年）熊本地震（M7.3）、平成30年北海道胆振東部地震（M6.7）のように、最大の地震発生から数か月経って、地震の発生数が緩やかに減少している中で大きな規模の地震が発生したことがある。

GNS観測によると、1月1日のM7.6の地震の後、およそ5か月間に能都（の）観測点で北西方向に約3cmの水平変動など、能登半島を中心に富山県や新潟県、長野県など広い範囲で1cmを超える水平変動、能登半島北部では輪島観測点で約7cmの沈降が観測されるなど、余効変動と考えられる地殻変動が観測されている。また、6月3日のM6.0の地震に伴い、この地震の震央周辺で最大2cm程度の水平方向の変動及び最大3cm程度の隆起が見られるなど、小さな地殻変動が観測されている。なお、陸域観測技術衛星「だいち2号」の合成開口レーダー干渉解析の結果によると、今回の地震に伴う有意な地殻変動は観測されていない。

能登半島西方沖から北方沖、北東沖にかけては、主として北東－南西方向に延びる複数の南東傾斜の逆断層が活断層として確認されている。この領域で2024年の地震後に取得した海底地形調査データと地震前の同等のデータを比較した結果、能登半島北西沖合の活断層帯に沿った広い範囲で北西側に対して南東側が隆起する断層変位が観測されていた。門前沖セグメントで約1～3m、猿山沖セグメントで約1～4m、輪島沖セグメントで約1～3m、珠洲沖セグメントでは約

2mの隆起が観測されていた。更に今回輪島沖セグメントと珠洲沖セグメントで最大3～4mの隆起が確認された。これらの隆起は1月1日のM7.6の地震に伴う変動を示している可能性が高く、南東傾斜の逆断層の活動が原因と推定される。

石川県能登地方の地殻内では2018年頃から地震回数が増加傾向にあり、2020年12月から地震活動が活発になり、2022年6月にはM5.4、2023年5月にはM6.5、2024年1月にはM7.6の地震が発生した。一連の地震活動において、2020年12月1日から2024年5月31日までに震度1以上を観測する地震が2351回発生した。また、2020年12月頃から地殻変動も観測されていた。

これまでの地震活動及び地殻変動の状況を踏まえると、2020年12月以降の一連の地震活動は当分続くと考えられ、M7.6の地震後の活動域及びその周辺では、今後強い揺れや津波を伴う地震発生の可能性がある。

- 5月21日に父島近海の深さ約50km（CMT解による）でM5.6の地震が発生した。この地震の発震機構は東北東－西南西方向に圧力軸を持つ型であった。
- 5月26日に茨城県南部の深さ約65kmでM4.7の地震が発生した。この地震の発震機構は東西方向に圧力軸を持つ逆断層型で、太平洋プレートとフィリピン海プレートの境界で発生した地震である。

（4）近畿・中国・四国地方

目立った活動はなかった。

（5）九州・沖縄地方

- 5月31日に熊本県熊本地方の深さ約15kmでM4.7の地震が発生した。この地震の発震機構は南北方向に張力軸を持つ横ずれ断層型で、地殻内で発生した地震である。

（6）南海トラフ周辺

- 南海トラフ沿いの大規模地震の発生の可能性が平常時と比べて相対的に高まったと考えられる特段の変化は観測されていない。

（7）その他の地域

- 5月10日に台湾付近でM6.5の地震が発生した。この地震の発震機構は北東－南西方向に圧力軸を持つ型であった。

補足（6月1日以降の地震活動）

- 6月1日に豊後水道の深さ約40kmでM4.5の地震が発生した。この地震の発震機構は東西方向に張力軸を持つ型で、フィリピン海プレート内部で発生した地震である。

注：GNSSとは、GPSをはじめとする衛星測位システム全般を示す呼称である。

2024年5月の地震活動の評価についての補足説明

令和6年6月11日
地震調査委員会

1. 主な地震活動について

2024年5月の日本及びその周辺域におけるマグニチュード（M）別の地震の発生状況は以下のとおり。

M4.0以上及びM5.0以上の地震の発生は、それぞれ90回（4月は272回）及び6回（4月は55回）であった。また、M6.0以上の地震の発生は1回（4月は14回）であった。

- （参考） M4.0以上の月回数81回（69-104回）
（1998-2017年の月回数の中央値、括弧の値は半数が入る範囲）
M5.0以上の月回数10回（7-14回）
（1973-2017年の月回数の中央値、括弧の値は半数が入る範囲）
M6.0以上の月回数1回（0-2回）
（1919-2017年の月回数の中央値、括弧の値は半数が入る範囲）
M6.0以上の年回数16回（12-21回）
（1919-2017年の年回数の中央値、括弧の値は半数が入る範囲）

2023年5月以降2024年4月末までの間、主な地震活動として評価文に取り上げたものは次のものがあつた。

- | | | |
|----------------------|---------------|----------------|
| － 能登半島沖 | 2023年5月5日 | M6.5（深さ約10km） |
| － 千葉県南部 | 2023年5月11日 | M5.2（深さ約40km） |
| － トカラ列島近海（口之島・中之島付近） | 2023年5月13日 | M5.1 |
| － 新島・神津島近海 | 2023年5月22日 | M5.3（深さ約10km） |
| － 千葉県東方沖 | 2023年5月26日 | M6.2（深さ約50km） |
| － 苫小牧沖 | 2023年6月11日 | M6.2（深さ約140km） |
| － 鳥島近海 | 2023年10月2日～9日 | 最大M6.5 |
| － フィリピン諸島、ミンダナオ | 2023年12月2日 | Mw7.5 |
| － 令和6年能登半島地震 | 2024年1月1日 | M7.6（深さ約15km） |
| － 福島県沖 | 2024年3月15日 | M5.8（深さ約50km） |
| － 茨城県南部 | 2024年3月21日 | M5.3（深さ約45km） |
| － 岩手県沿岸北部 | 2024年4月2日 | M6.0（深さ約70km） |
| － 台湾付近 | 2024年4月3日 | M7.7 |
| － 大隅半島東方沖 | 2024年4月8日 | M5.1（深さ約40km） |
| － 豊後水道 | 2024年4月17日 | M6.6（深さ約40km） |

2. 各領域別の地震活動

（1）北海道地方

北海道地方では特に補足する事項はない。

（2）東北地方

東北地方では特に補足する事項はない。

(3) 関東・中部地方

ー GNS S観測によると、2022年初頭から、静岡県西部から愛知県東部にかけて、それまでの傾向とは異なる地殻変動が観測されている。これは、渥美半島周辺のフィリピン海プレートと陸のプレートの境界深部における長期的ゆっくりすべりに起因するものと考えられる。

(4) 近畿・中国・四国地方

ー GNS S観測によると、2019年春頃から四国中部でそれまでの傾向とは異なる地殻変動が観測されている。これは、四国中部周辺のフィリピン海プレートと陸のプレートの境界深部における長期的ゆっくりすべりに起因するものと考えられる。この地殻変動は、2023年秋頃から一時的に鈍化していたが、最近は継続しているように見える。

ー 4月17日の豊後水道でM6.6の地震が発生して以降、地震活動は減衰しつつも継続しており、4月17日23時から6月10日09時までに震度1以上を観測した地震は82回（震度6弱：1回、震度4：2回）発生した。

(5) 九州・沖縄地方

九州・沖縄地方では特に補足する事項はない。

(6) 南海トラフ周辺

ー「南海トラフ沿いの大規模地震の発生の可能性が平常時と比べて相対的に高まったと考えられる特段の変化は観測されていない。」：

（なお、これは、6月7日に開催された定例の南海トラフ沿いの地震に関する評価検討会における見解（参考参照）と同様である。）

（参考）南海トラフ地震関連解説情報についてー最近の南海トラフ周辺の地殻活動ー（令和6年6月7日気象庁地震火山部）

「現在のところ、南海トラフ沿いの大規模地震の発生の可能性が平常時（注）と比べて相対的に高まったと考えられる特段の変化は観測されていません。

（注）南海トラフ沿いの大規模地震（M8からM9クラス）は、「平常時」においても今後30年以内に発生する確率が70から80%であり、昭和東南海地震・昭和南海地震の発生から約80年が経過していることから切迫性の高い状態です。

1. 地震の観測状況

（顕著な地震活動に関する現象）

南海トラフ周辺では、特に目立った地震活動はありませんでした。

（ゆっくりすべりに関係する現象）

プレート境界付近を震源とする深部低周波地震（微動）のうち、主なものは以下のとおりです。

（1）紀伊半島中部から紀伊半島西部：5月30日から6月2日

2. 地殻変動の観測状況

（ゆっくりすべりに関係する現象）

上記（１）の深部低周波地震（微動）とほぼ同期して、周辺に設置されている複数のひずみ計でわずかな地殻変動を観測しています。周辺の傾斜データでも、わずかな変化が見られています。

G N S S観測によると、2019年春頃から四国中部で観測されている、それまでの傾向とは異なる地殻変動は、2023年秋頃から一時的に鈍化していましたが、最近は継続しているように見えます。また、2022年初頭から、静岡県西部から愛知県東部にかけて、それまでの傾向とは異なる地殻変動が観測されています。

（長期的な地殻変動）

G N S S観測等によると、御前崎、潮岬及び室戸岬のそれぞれの周辺では長期的な沈降傾向が継続しています。

3. 地殻活動の評価

（ゆっくりすべりに関係する現象）

上記（１）の深部低周波地震（微動）と地殻変動は、想定震源域のプレート境界深部において発生した短期的ゆっくりすべりに起因するものと推定しています。2019年春頃からの四国中部の地殻変動及び2022年初頭からの静岡県西部から愛知県東部にかけての地殻変動は、それぞれ四国中部周辺及び渥美半島周辺のプレート境界深部における長期的ゆっくりすべりに起因するものと推定しています。このうち、四国中部周辺の長期的ゆっくりすべりは、2023年秋頃から一時的に鈍化していましたが、最近は継続しています。

これらの深部低周波地震（微動）、短期的ゆっくりすべり、及び長期的ゆっくりすべりは、それぞれ、従来からも繰り返し観測されてきた現象です。

（長期的な地殻変動）

御前崎、潮岬及び室戸岬のそれぞれの周辺で見られる長期的な沈降傾向はフィリピン海プレートの沈み込みに伴うもので、その傾向に大きな変化はありません。

上記観測結果を総合的に判断すると、南海トラフ地震の想定震源域ではプレート境界の固着状況に特段の変化を示すようなデータは得られておらず、南海トラフ沿いの大規模地震の発生の可能性が平常時と比べて相対的に高まったと考えられる特段の変化は観測されていません。」

参考1 「地震活動の評価」において掲載する地震活動の目安

- ①M6.0以上または最大震度が4以上のもの。②内陸M4.5以上かつ最大震度が3以上のもの。
- ③海域M5.0以上かつ最大震度が3以上のもの。

参考2 「地震活動の評価についての補足説明」の記述の目安

- 1 「地震活動の評価」に記述された地震活動に係わる参考事項。
- 2 「主な地震活動」として記述された地震活動（一年程度以内）に関連する活動。
- 3 評価作業をしたものの、活動が顕著でなく、かつ、通常の活動の範囲内であることから、「地震活動の評価」に記述しなかった活動の状況。
- 4 一連でM6.0以上が推定されたゆっくりすべりとそれに伴って発生した低周波地震(微動)。